

銃剣道の理念と技術の特性

社団法人 全日本銃剣道連盟 専務理事 兼坂 弘道

銃剣道修行の理念

銃剣道の修行は、たゆまない努力によって心身を鍛錬陶冶し、礼節を尊び、信義を重んじ、規則を守る習慣を身につける等、社会人として必要な道徳性を高め、「正しく、明るく、強く、逞しい人間形成」を目指し、精進して行くことを理念としている。

この理念は、銃剣道の修行段階において武道の真理を探究し、心身の鍛錬を通じて人として社会生活を健全に営むために必要な気力・体力を養い、競技力を高めるスポーツ的效果を生かして、余暇を有効に活用して生活に対しての潤いを養い、社会人としての品格教養を高め、粗暴な行為を戒めることに寄与できることを念願し、個人としては武道としての真理ともいえる「正しさ」を尊び、人格を尊ぶ、「礼節」を重んじ、「卑しきを用いない」正々堂々とした態度を育成して、人としての歩むべき道を求め、将来に対し常に積極的で明るい発想をもち、ストレス・プレッシャーに対しての抵抗力を養うことをねらったものである。その端的な表現を「正しく、明るく、強く、逞しい」としたのである。

理念を更に具体的に記述するならば、銃剣道のアイデンティティは何であるかを明らかにし、銃剣道の特性を十分に理解し、共鳴へと発展し、自らが進んで精進努力してもらえようように心がけているところである。

銃剣道のアイデンティティを要約するならば、

- ① 銃剣道は、わが国の伝統的武技の一つである、槍術を源流とした武道種目である。
- ② 銃剣道は、わが国武道の美風である「誠実」「礼節」「勇気」「質実剛健」及び「克己心」等の精神徳目を養成し、社会に有為な人間形成に貢献しようとするものである。
- ③ 銃剣道は、「突く」「抜く」「打つ」「払う」「押す」「引く」「かわす」「走る・跳ぶ・歩く」等の、人間が生活する上で欠かすことのできない、基本的運動能力を育成しながら身体的性能力を高め、国民の健康・体力づくりに貢献し、豊かな社会生活をするための市民スポーツ的な面を助長しようとするものである。
- ④ 銃剣道は、「突き技」という最も単純平易な身体運動であるから、青少の若い段

階から馴染やすい反面、突き技の神髄を極めるには奥深いものがあり、技倆の継続的な練習が必要であり、練習（稽古）を重ねることによって生涯を通じての向上心を刺激し、生涯学習としての要素を満足させようとするものである。

- ⑤ 銃剣道は、木銃を用いて双方相対して行う対人競技であり、定められた「突き部位」に対する「突き技」の成否で勝敗を決するものであるから、「打つ動作」は相手の木銃を払う場合以外には用いない。
- ⑥ 銃剣道は、稽古及び試合を通じて「知」「情」「意」バランスの撮れた精神発達を図り、社会的適正を育成し、心肺機能・筋力・敏捷性・反応能力及び全身持久力を高めようとするものである。
- ⑦ 銃剣道は、武道種目が共有している、「礼儀」「良い躰」「良い習慣」を日常の稽古の課程から習性化しながら、導入段階において「楽しさ」「面白さ」を自得させ、「やってみよう」という自覚性を助長していくものである。
- ⑧ 銃剣道は、順序正しく習得し、用具を正しく用いることにより、安全で運動量の大きい武道である。

以上を銃剣道のアイデンティティとし、「やって楽しく、見て面白さ」を感じさせ、その中で武道としての銃剣道の本質を身につけてもらい、試合においては、「スピーディーで美しい試合」ができ、「勝つに卑しき技を用いず、敗れて卑屈な態度に陥らない」正々堂々とした態度が維持できるように努力することを主眼としているのである。

銃剣道の由来

銃剣道の前身的存在である銃剣術は、明治建軍当時に兵員の武技として採用されたものであるが、当時は剣術優位の中において、銃剣術の必要性を主張する勢力が胎動し、剣術・銃剣術双方の真剣な論議の末、銃剣術組みが優勢となり、軍隊に銃剣術が採用されたものである。

軍隊の武術に銃剣術の採用を主張したのは、フランス留学から帰国した斎藤徳明であり、剣術を主張したのは、戊辰戦争の官軍側で活躍した山地元治であったと言われている。

当時の各鎮台（師団）において用いられた銃剣術（銃槍術とも言われていた）は、わが国古来の槍術から創意されたものが主流で、1880年5月明治天皇が、陸軍戸山学校を視察された際に、同校の教官・助教が天覧に供したものは、木銃の長さが220

センチメートルで、防具は槍術用の物が使用され、技倆としては長槍の「繰り突き技」が多用されたとの史実が残っている。

明治建軍当時のわが国陸軍の軍制はフランスの制度を採用した関係もあり、1874年（明治7年）にはフランス体操教官ジュクローがフランス剣術（フェンシング）を紹介し、1884年（明治17年）8月にはフランス陸軍中尉ド・ビラレー及び軍曹キエールを銃剣術教官として陸軍戸山学校に招聘し、フランス式の銃剣術教育が始められた。その原形は図～1のとおりである。

突きの動作及び「足さばき」はフェンシングに類似し、当時は「バイヨネット」と呼ばれていた。

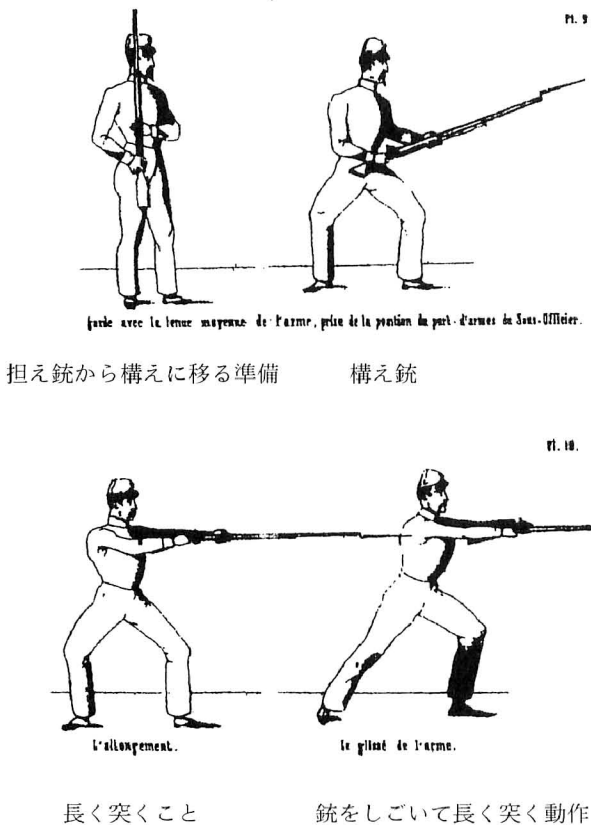
ド・ビラレー中尉は「日本式剣術教育は、爾今廃止し、フランス式剣術を教育すべきこと」と、当時の陸軍卿西郷従道に進言し、これが採用されて、わが国独特の銃剣術は疎んぜられるところとなった。しかし、フランス式剣術はスポーツ的な考えが主体をなしていたものであるから、実戦的な利用価値に欠ける面もあり、各地方では定

着せず、陰では日本古来の槍術・剣術を中心とした銃剣術、剣術が根強く行われていた。

1887年（明治20年）11月にド・ビラレー、キエールの両名が帰仏するに及んで、再びわが国の銃剣術が蘇り、1890年（明治23年）陸軍戸山学校長大久保春野は、フランス式銃剣術・剣術を廃止して、日本式の銃剣術・剣術を復活することとし、同校の体操科長である津田教修（津田一伝流の継承者）が陸軍の剣術教範の改正を担当し、1892年（明治25年）日

図～1

フランス陸軍ミュール式銃剣術（1830年代）



本古来の銃剣術及び剣術が軍隊の正式科目に採用されたのである。

史実として残っているのは、上野国立博物館所蔵の宝蔵院流槍術秘事（寛政 10 年 4 月，早川長左衛門手記）が銃剣術に引用されており，その構えにおいては，「敵の左拳にわが肩を比べ候らえば格好あうなり」を参考にして考えられており，銃剣の長さも「肘より指先までの長さを適当とする」旨の記述が参考にされたようである。

返突動作については，「上段に構えたところへ素槍下段より十文字槍の前横手へ付ける時に前に引き落として突くなり」は，右の払い技に利用され，枯華と名付けられた技で「素槍下段小右の脇にかかり突き出すところを，逆に打ちて突くなり」は左の払い技に継がれ，「相下段の素槍より腰の上を突きし時，横手にかぶりかけ，素槍の柄にそいて拳ぎわをすり突きて勝つなり」は下の払い突きに受け継がれている。

また，「浦波」という槍の突き技が「押圧の突き技」に，体を転じての突き技が銃剣道における「体を開いての仕掛け技」に用いられている。（剣術の心理学的研究，昭和 2 年成武堂を参考）また明治 30 年に発行された「槍体操」は，棒・薙刀・銃剣術において活用されるべき事が述べられている。

銃剣術に引用された槍術流派には上記のほか，佐分利流，正田流，貫流等が中心であったことを窺い知ることができる。

明治 25 年当時の銃剣術に用いられた用語の主なものは次のとおりである。

- 「直^{チョク}突^{トツ}」銃剣の位置を変えることなく真直ぐに突く技
- 「脱^{ダツ}突^{トツ}」右手を少し上げて剣先を下げ，剣先の交叉を反対側に外して突く技
- 「切^{キリ}突^{ツキ}」両手を上げ，相手の剣先の上部より突く技
- 「突^{ツキ}下^{シタ}」剣先を下げて相手の下胴を突く技
- 「繰^クり突^{ツキ}」相手との間合いが遠い場合に，銃剣を左掌中を滑らせて突く技
- 「打^ダ撃^{ゲキ}，押^{オウ}圧^{アツ}」相手の銃剣を打ち払い，除去して突きを容易にする技術
- 「隙^{ゲキ}突^{トツ}」相手が払い，打った後の隙を捉えた突き技
- 「遏^{カッ}突^{トツ}」相手の数度の連続突きの際の空隙を突く技
- 「佯^{ヨウ}突^{トツ}」連続した突き
- 「機^キ会^{カイ}の突^{ツキ}」相手の動作の起こりを捉えた突き技

以上の技術が銃剣術の技術の原点であったとすることができる。

その後，1915 年（大正 4 年）に銃剣術教範の改正が行われ，1925 年（大正 14 年）には，大日本武徳会の独立科目として銃剣術が認められ，国民体育大会の前身的存在と言える明治神宮大会には第 1 回大会（1924 年）から銃剣術が参加している。

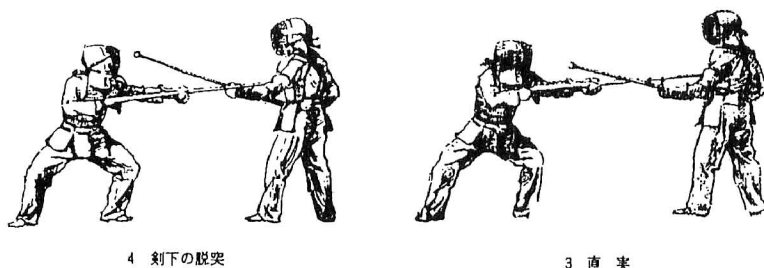
銃剣道の名称は，1940 年（昭和 15 年）の檀原神宮武道大会から用いられ，翌 41 年（昭和 16 年）には大日本銃剣道振興会が創設され，「術」のみではなく武士道精神

の修行を加味した教育的武道としての普及に努めたが、1945年8月の終戦とともに銃剣道は活動を禁止されるに至ったのである。

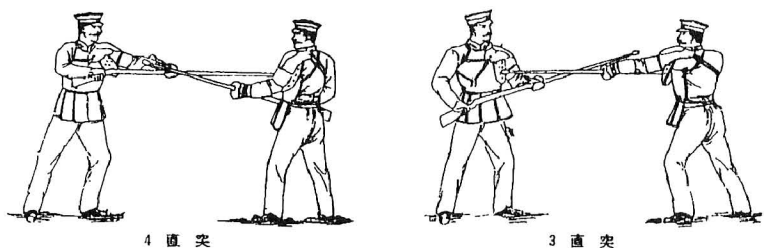
明治・大正・昭和年代の銃剣術の基本的動作の変遷は図～2のとおりである。

図～2

明治22年当時の銃剣術動作（明治25年教範の原形）



大正4年における銃剣術動作



昭和年代も本資料が原形となっている。

銃剣道の再興

1945年（昭和20年）までの銃剣道は、創設の経緯から考えても戦技的色彩が強く、教育目的においても「銃剣の使用に習熟し、近接戦闘における自信を与えるに足る体力、気力を養成にある」ことであつたが、現在の銃剣道は戦技色を払拭し、日本古来の美風である武道精神を基軸において、槍術の極意である『突き技』を継承修行し、心身を鍛練し、社会に有為な人間形成に役立てることを目的として、1956年（昭和31年）に全日本銃剣道連盟を創設し再生を図ったものである。

創設当時は、戦前銃剣術に対する批判ムードが強い時代でもあり、銃剣道の普及には多くの障害があつたが、当時の連盟会長今村 均氏、理事長鶴沢尚信氏及び草地貞

吾氏をはじめとする、諸先輩の文字通り臥薪嘗胆しての尽力により、漸く再興の道づくりが成されたのである。

1970年（昭和45年）に社団法人全日本銃剣道連盟の設立が認可され、1973年（昭和48年）には日本体育協会への加盟が承認され、1980年（昭和55年）から国民体育大会の正式競技種目となり、毎年の国民体育大会において成年男子・少年男子の部の競技会で活気ある試合を展開しているところである。全日本銃剣道連盟が毎年恒例的に開催している全国的な競技大会は、

4月には全日本銃剣道優勝大会（団体試合）

8月には全日本少年武道（銃剣道）練成大会（小中学生対象個人・団体試合）

全国高校生銃剣道大会（団体・個人試合）

全日本青年銃剣道大会（19歳～24歳対象団体・個人試合）

全日本銃剣道選手権大会（個人試合）

10月には国民体育大会銃剣道競技大会（都道府県対抗試合）

2月には全日本短剣道選手権大会（団体・個人試合）

であり、逐年隆盛をみている。

銃剣道の活性化対策

銃剣道の活性化を考える場合には、武道としての銃剣道をどのように蘇らせるかと言う観点と、スポーツ競技としての銃剣道をどのように発展させるかと言う観点の両面から考えていく必要がある。

（1）武道としての銃剣道の活性化

わが国の武道は、その源泉は武士社会が必要とした武技を修練する過程において身体的発達と精神的発達が良い影響をもたらし、伝統的な美風として国民各層によい結果を与えてきた意義を見出し、これを普及発展に結びつけることに努めるべきであるように思っている。

武道は武技を活用して修行・稽古することを重ねて心身の発達を図るものであるが、この場合、武道と言う抽象的な表現だけで「私は武道をやっている」とは言わない。

武道を志す人は、いきなり武道に取り組むのではなく、先ず武道を習得しようとする前に、何れかの武技を選択し、真剣かつ厳しく学ぶ過程において武技の本質を体得し、その発展段階で武道の何であるかを習得するものである。

銃剣道を修行しながら武技としての真髄を極め、精神的には「誠実」「礼節」「信義」

「勇気」「質実剛健」及び「克己心」等の資質を養い、ひいては武道としての教育目的を達成しようとする考えは、他の武道種目と何ら変わるところはないものである。特定の武技に武道が存在するのではなく、いわゆる武芸十八般それぞれに独自の指導理念があり、これまでの歴史的背景・用いる武技の特性を活かして指導していく過程において、人間形成に必要な資質を教え込んでいく事が武道の本質であると思っている。

銃剣道は動きにおいて起こり（前兆行動）が少なく、一挙動で真直ぐに突出す技を最良のものとしているので、単純な突き技の中にも奥深い真理のあることを理解させる必要がある。習字の稽古においても字画の少ない文字ほど難しいと言われるように、銃剣道も単純な「突き技」の反復であるが、やればやるほどの蘊奥を極めることに意思力の強さが要求される。焦らず、諦めずに努力する習慣づけをして、何時如何なる場合でも平常心を保ち、驚き、懼れ、疑い、惑うことの心の乱れを抑え、油断しない気持ちで自分を向上していくことに結びつける事ができれば、精神面の活性化が図られることを基礎において指導していき、室鳩巢が唱えた「明君家訓」にある節義の士たる者の具現が必要かつ望ましい姿であると思っている。

（２）武道競技としての銃剣道の活性化

スポーツ競技種目が多様化し、興味本位に走る傾向の強い現況において、銃剣道のみが修行道の追求に孤高を保つことは崇高な考えではあるが、次代を担う青少年に魅力を感じさせるものがなければ活性化は難しく、将来性はおぼつかないものに陥る事であろう。前項では真剣で厳しい学習が武道の本質であると論じながら、興味を与え魅力的な実践活動をすることの矛盾が、指導の過程においてのし掛かってくるが、硬軟自在の指導活動により活性化を図っていかなくてはならない。

銃剣道では、指導体系の見直しを行うとともに、「銃剣道教則」及び「試合審判規則」の改正を果たし、用具・稽古着等も武道に相応しいものに改善し、「分かりやすく、スピーディーで美しく、正しい」武道種目に育て上げていくことによって活性化を果たしていきたいと思っている。具体的には年代に応じた競技の在り方を考え、少年段階には基本を忠実にしかも興味が持てるような「形演技の試合」方式を採用し、高齢者の試合にも「形演技の試合」方式を取り入れ、少年期より高齢者に至るまでの文字通り生涯スポーツとしての存在意義を高めていく考えである。（現在の銃剣道図～３）

（３）審判制度の活性化

銃剣道の試合を活気溢れるものにするか、盛り上がりのないものにするかは、一に懸かって審判の適否にかかっていると申しても過言ではない。特に銃剣道は突き技の一瞬を判定して勝敗を採決する訳であり、木銃の剣先の動きは烈しく、また、突き技

図～3

現在の銃剣道



は突いて抜かなければ有効技とはならないものであるから、見極めに厳しいものがある。従って銃剣道の審判員には、突き技に対する眼光紙背に徹した厳しい判定眼、公平無私な審判態度、銃剣道に対する理論的、技術的な見識熟練度が必須の条件であるので、審判員の技術等級のランク付けをして公正な試合運営を図ることが重要であり、試合者はじめ観客が満足のいく試合運営に当ることが活性化の原点であると思う。

突き技の決定的瞬間を見逃したり、誤審があったりするようでは、試合者の銃剣道意欲を阻害するのみではなく、斯道の存在意義を失墜しかねない問題であるので、審判員の養成指導を徹底し、緊張感のみなぎった中において分かりやすい審判をすることによって、銃剣道の活性化を図っていきたい。

現行の審判員等級は上位より、A級、B級、C級にランク付けをして資質・技術の向上に努め、銃剣道が分かりやすく魅力ある武道種目となる地位を維持していきたい。

結 語

武道としての銃剣道が再興されて47年が経過した今日においても、戦前の不幸なイメージが完全に払拭されていないと言う、宿命的な課題を背負わされているが、これは銃剣道に原因があるものではなく、斯道を指導普及する当事者の考え方に起因する問題があることを深刻に認識し、武道としての銃剣道を実践する事が精神的・身体的によい結果を醸成し、社会に貢献できる人間形成に役立つことを追求していくことが、銃剣道の存在意義を高めると言う認識に立って、地道な普及活動を進めていきたいものとする。

現在は少子化時代であることに加えて、興味をそそるニュースポーツや、見て楽しむテレビゲーム等に関心と呼んでおり、本来鍛錬的である武道種目を敬遠する風潮があることを直視し、鍛錬と楽しさを両立させることへの対応と、単純なことから複雑なものへの関心を高め、生涯を通じて身体活動ができ、余暇の有効活用と生き甲斐感と、試合後の満足感が得られる銃剣道の模索を図っていききたいものである。